

たからと云つて、叔母が背をふりむけて見せた。

門を出ると今度は威勢よう、黄昏時の狭い町を走る。灯した家、ともさぬ家。腕車はそれらの間を軽く縫うて、再び七條のはとりに立つたのは、入日の後が白ううすれて、東山を月のはなる頃であつた。さるにても、辛き宿世の身よ、悲しみの極みは矢張涙である。(十月十四日稿)

白檀火

紫 秋

一
床よりいと蕭やかに香の煙り、
緑の絲のふたすぢ夕闇ぬひ、
夕顔、花の白帕、静にすべり
紫摩金さゆらぐ葎の底に消ぬぬ。
夕ばへ紅き白壁いつか沈み
寂寥やうやく室にみちわたれば
そよると花藻は池に閃き散り
夕月こそわのひまゆ仄に匂ふ。

このとき君が琴の音胸に泌みて

身内は火宅の熱に丹の雨ふり
甕かる白英しきりに大苦患の

黒霧吐きぬ。——鈍れる眼に映るは
爛壞の星のきらびやか、はたさらすば
夜天にかがやく熔岩が——白檀の火。

二、死の島

いまこそ運命つきしか、昨日までは
歡樂の宴に身をも忘れはて
瑠璃波ふかくわけいり夢みるわれ
いつしか、けはひは移り、煙る死の海
灰濁む波のかなたに夕日じづみ
光りは苦むす岩の間を透きて
白堊の砦に寒う照りかがよひ

はのかにうごかぬ波に影は匂ふ。

懼こぎいる死の島これぞ罪の終り

佇びむ白衣のわれは額ひかをもたげ

みつむる杉のみ森の闇のかなた

静寂じよじやくやぶりてひびく沈鐘ちんしようこそ

苛責かしやくの鞭笞しもごふりあげ追ひくる夜叉やま

悔の身いかになげくも黄泉よみに落ちぬ。

三、多羅葉

大虚たいきよに炎波ほなみながるゝ眞夏まなつき時は

野をゆく水もにわばみ、草はしかへ

人さへ火を吐くといきたへ難がたきに

十丈じゆじやう、そひやぐ幹は白くてりて

永劫えうじやく、瑞葉みづはまとへる多羅葉樹たらえうすの

そが花、熱射をうけて緑のひま

銀光ぎんこうちりばむ姿すがたながらにも

勢せいよく蒼浪あゐなみいづる白衣びやえの蜃女あま。

すゝ風はらむ、そが蔭流れ澄みて

憩やすみへるわが胸そぞろ春のたもひ、

玉水たまみづ含みてわらぐ慈悲心鳥、

たりく羽はばたく音に花香かほこぼれ

音ねかくちりくる白き花は

噫あゝこれ希望のぞみの星の示現しげんの譜か。

四、磯へ

磯いそべあるかあきかの波のゆらぎ

そらいろしづく海づらか、やくあへ

爪つめかに影こそうつれ鸚鵡あひろがひ貝がひの

うすもの、そは海神むつみかみのまひるの夢。――

海ぞこ深く埋みし白玉しらたまをば

眞白ましろの花葩はなに包み静しづの海の

追風おひかぜ、凧たこをわらびて、沖も遙はるに

浮うべく、――汝なれにぞ常住じやうじゆに風かぜあからむ。

玳瑁たいぼうあそぶ洲すさきの白き砂は

鼈甲べいこかやく色に照りもはゆれ。

こを觀よ、海の姿を愛づる君よ
 ひたすら、——沙漠の旋風、熱沙をまさ
 矗立つ天柱、驅ける蹤を趁ひて
 埋るゝ晶玉わんは——空の冀願。

五、わかきたもひ

我れいま十八、若き思ひは、はや
 曉あはき光の噴水のもと
 大輪紅蓮の華と咲きて匂ふ。
 すゝ風かよふ小窓の瑠璃鏡のへ
 うかぶは朝髪姿君が笑みか——
 あだなり。——あゝ我が華の思ひのかげ。
 つふたつ露は彩色、わが命の
 若やぐ精の眞玉と照りかゞねふ。

天なる河原にひらく星浮草
 一夜を、漂ふ胸の緒琴に觸れ
 星波たわむひびきに思ひみちて
 まだきに心は羽搏ち君にはくり、

渦くたけか髪朝姿を
 待つあり。——若き思ひの紅蓮の華。
 (未完)

濃霧

露草

霧沸く。風に渦巻いて重なり伏せる
 落葉松の枝より葉より濛々と。
 行手に高き赤銅の色せし巖に
 靡くど見れば七筋の白蛇のうねり
 忽ちにして嶺をこね谷を埋みて
 來し方は吹雪にかりぬ。乱れ打つ
 雪みぞれ小石まじりに吹き上ぐる
 風は無極の大空洞地軸を抜いて
 横ざまに一萬尺の高地帯
 さしも巖たる山の威を蔑む如く
 颯々と岩角鳴らし吹きめぐる。
 山は變らぬ億劫の代緒の色に